

〈論文〉

近代日本の戦争・軍隊と名物おみやげの形成

鈴木勇一郎

はじめに

旅行の際に各地の名物をおみやげとして家族や知人に配るといふ風習は、日本ではポピュラーな文化である。ところが、こうした日本のおみやげ文化は、国際的にみると極めて特異である。¹⁾

この分野についての研究はあまり進んできたとは言えないが、その中で神崎宣武は民俗学の立場から取り組み、「神人供食」といったおみやげの起源やその近世における展開などを明らかにしている。²⁾ 神崎はこの中で近世における名物と近代のおみやげとの間には落差があることを指摘しているが、近代におけるおみやげの展開を具体的に分析しているわけではない。

近代のおみやげの展開を具体的に分析したものとしては、加原奈穂子によるきびだんごを対象としたものが、数少ない業績である。加原は、日清戦争などを通じてきびだんごが桃太郎伝説と結びついていく過程を分析し、名物の形成にあたっての「物語」の重要性を指摘している。³⁾ もちろんこうした文化的要素なくして名物やおみやげを語ることはできないが、現実には「商品」でもある以上、産業としての要素もあつてはじめておみやげという風習が成立しているということもできる。

こうした中で筆者は、近代日本のおみやげについて検討し、博覧

会や鉄道など近世とは異なった近代的な装置とおみやげとの関連性を明らかにした。⁴⁾ ここでは、とりわけ鉄道との関係を強調したが、近代のおみやげの展開に大きな影響があつたのは、これだけに限らない。

軍隊および戦争は、近代国家が体験してきた装置や状況の中でも最も国民に影響を与えて来たものの一つである。

国民経験としての戦争や軍隊をめぐっては近年研究が盛んに進められてきたが、大きく見ると、直接的な戦場経験自体を問題とするもののほか、徴兵制を軸とする軍隊教育、地域社会との関係を重視したものなどに、その研究動向は大別することができる。⁵⁾

その中でも、日清戦争は近代日本が初めて体験した本格的な対外戦争であり、その過程を経て国民が形成されたという点で、極めて特異な位置づけを与えられている。しかし、戦争や軍隊を通じての体験は、かならずしもこうした直接的な軍事的、政治的影響にとどまるものではない。きびだんごを分析した加原も名物の形成にまつわる物語の形成をめぐって、日清戦争の画期性を指摘しているが、近代国家の装置としての戦争および軍隊の継続的な広範な影響を慎重に検討していく必要がある。

また、前近代から近代を貫く問題であることや、冒頭で指摘したような外国と比べて特異であるといった特徴は、逆にいえば時代の深さと地域の広がりの中で日本近代の特質を把握できるテーマということができる。

こうした問題意識を踏まえ本稿では、前近代から続く文化であるおみやげと商品である名物が、日清戦争以降経験するようになった対外戦争やそれを支える軍隊というシステムを通じて変容し、ある

いは形成されていったのかを検討していく。

一、国民体験としての戦争と名物の伝播

将兵の動員と名物の伝播

日清戦争は、日本が迎えた初めての本格的な対外戦争であり、その経験を通じて国民が形成される契機となった。

戦争に際しては数多くの将兵が動員され、戦地へと送られていった。内地から戦地へは、全国至るところから輸送船に乗せられたのではなく、基本的には広島へ集められ、宇品港から出征していったのである。

神戸から西へと建設されていた山陽鉄道は、日清戦争開戦直前には、広島まで開業し、官設東海道線と接続することで、広く東日本からも鉄道で広島へ兵員を輸送することが可能となったのである。山陽鉄道では、広島から出港地となる宇品まで支線を突貫工事で建設し、軍事輸送を開始した。

当時の日本の鉄道は、その多くは単線ではあったが、すでに本州最北端の青森から東京・大阪を経て広島に至る縦貫線が完成していた。この時点で金沢と新発田を除く本州の全ての衛戍地から広島まで、鉄道で兵員を輸送することが可能となっていたのである。

日清戦争が始まると、多い時で一日当たり一〇本の軍用列車を運転して将兵や物資を輸送するようになり、戦争の全期間を通じて鉄道で輸送された人員は三九万人にのぼった。原田敬一は戦争にあたり動員された全兵力は、軍人と軍夫を合わせて三九万五〇〇〇人のぼったと推定しているが、少なくとも日本人がそれまで経験した

ことのない規模の移動が一挙に日本列島内で行われたことはまちがいない。

こうした日清戦争に伴って生じた人々の移動が作り出していったおみやげのひとつに岡山の吉備団子を挙げることができる。

一般を対象としたアンケート調査でも圧倒的な知名度を示すなど、現在吉備団子は同県を代表するおみやげといっても過言ではない。今日、吉備団子は桃太郎伝説のイメージと分かちがたく結びついている。鬼退治へと向う桃太郎が雉や猿に「黍団子」を与えて家来にした、という昔話はよく知られているが、この吉備団子とは音が同じというだけで、実は意外なことに両者に直接の関係はない。もちろん現在店頭で売られている吉備団子の中には黍を入れていたものもあるが、別に吉備団子にとつて黍が不可欠のものとして扱われているわけではない。今に続く吉備団子の出現はそう古いものではなく、せいぜい幕末までしかさかのぼることができないようだ。その創始についてはいくつか説があるようだが、有力なものは次のようなものである。

一八五五(安政二)年、備前国岡山の武田伴侶、高砂町信楽屋、笹々野良栄という三人の人物が相談し、茶菓子として「赤色の搔餅やうなる四角形の菓子」をつくり、「吉備だん粉」と名づけたのがその後の吉備団子の原型となった。この時にはあくまで「道楽半分のみなぐさみ」であり、商品として販売するものではなかった。その後、武田伴侶の親戚である武田浅二郎が形状を丸型にするなどこれを改良し、一八六八(明治一)年に商品化したという。

売り出し始めたころの吉備団子は、すぐ固くなり保存には向かなかったが、山陽鉄道開通後、岡山駅構内で販売される際に求肥が用

いられるようになった。¹³一九二〇年代にこの吉備団子を紹介した文章で「内容はハイカラな求肥餅¹⁴」と紹介されているように、このことは広く行きわたっていた事実であった。また、「四時能く貯蔵に堪ゆる¹⁵」ことが特色と指摘されていたように、ここでも保存性の向上がメジャーなおみやげたり得る大きな要素であったことがわかる。

静岡の安倍川餅も東海道の茶屋の名物から、静岡駅でおみやげとして売られるようになっていく過程で求肥が用いられるようになってきたが、これと同じようにおみやげ化に当たって、内容の換骨奪胎が行われたのである。こうして吉備団子は、その場で食べることが前提の茶菓子から、おみやげとされる名物へと転形していった。

日清戦争終結後、戦地から帰還してきた将兵は宇品に上陸し、その多くが山陽鉄道を利用して復員していった。その途中、岡山駅で売られている吉備団子を郷里へのおみやげとして買い求めたことが、全国的な知名度を獲得する大きな契機となったとされている。¹⁷

戦地へと赴く兵士たちが出征する際には、郷土の親戚、知人、友人たちの盛大な送別をうけることが一般的であった。¹⁸その際に出征兵士は饞別を受けていたので、運よく無事に凱旋した場合には、当然おみやげを配ることが必要だったのである。広栄堂の主人である武田は、岡山中帰還将兵を待つだけでなく、自ら広島へ赴いて桃太郎の扮装をして彼らを出迎え、吉備団子購入の予約を取るなど、積極的な拡販策を展開した。そこで武田は帰還してきた兵士たちを鬼退治に赴いた桃太郎になぞらえ、吉備団子を宣伝したという。¹⁹そこでは清国という外国と鬼退治の桃太郎伝説という、共に外敵を退治するというイメージが交錯していた。²⁰

吉備団子は、彼らの多くが通過する岡山駅という地の利に加えて、鬼を征伐した桃太郎というイメージ戦略が複合することで、急成長した名物であった。こうして二〇世紀初頭には吉備団子の製造業者は一〇軒以上となり、駅構内だけで一日平均六〇〇個を販売するようになった。²¹このように次第に「山陽線中では一番よく売れる名物²²」としての地位を築いていったのである。その過程で桃太郎の黍団子のイメージとリンクされるようになり、伝統的な名物のイメージが確立していったものであろう。

現在、桃太郎といえば岡山というイメージが一般的となっているが、岡山が桃太郎伝説地であるという説の登場は意外に遅く、昭和以降のことであった。戦時体制期には戦意高揚、戦後は国体開催のシンボルなどとしてそのイメージを確立してきたのである。²³とはいえ、桃太郎伝説と結びつけられた吉備団子が、明治時代に岡山の名物となっていたことは、その後岡山が桃太郎伝説の地というイメージが広く受け入れられていく上で大きな影響があったことはまちがいないだろう。実際昭和初期には「桃太郎を岡山県人として鬼ヶ島を瀬戸内海の一島に充てて伝説を生かしてみたら、なほ一層吉備団子に宣伝効果の実が挙がる²⁴」などと、すでに吉備団子を通じて岡山桃太郎伝説の形成を助長するような言説が見られるようになっていたのである。

戦地への「出入口」としての広島と宮島名物

前節でも触れたように、山陽鉄道が広島まで開通し大本営が置かれたこともあって、将兵の多くは広島宇品港から大陸などへ出征していった。広島は戦地への出入り口となったのである。広島には北

海道と九州などを除く本州全域から将兵が動員されたので、広島とその周辺には数多くの将兵が集まることとなった。こうして集まった将兵たちによって一挙にその名を知られるようになった名物のひとつに宮島の杓子がある。

宮島は厳島神社が存在し日本三景の一つとして古くから多くの参詣者を集めてきた。宮島では「杓子」、「轆轤挽物」、「厳島彫刻」といった「宮島細工」が名産として生産されていた。しかし近世の宮島では富籤興行が認められ、これが島民の大きな収入源となっていたため、従来はあまりみやげ物開発や生産には決して熱心ではなく、基本的には「ただ遊びながら悠々として日月をわたる」⁽²⁷⁾ような状況が続いていたという。ところが明治維新後にこの特権が廃止されると、彼らの姿勢も次第に改まっていかざるを得なくなった。二〇世紀に入ると「概ね旅客の祠を養い、船舶の碇泊するものにまちて生計の資を得」⁽²⁸⁾るような状況となっていたという。

宮島では千畳閣を建設した際、作業員の間食として考案されたという由緒が伝えられている太閤餅が、近世以来の「名物」として知られていた。これは明治以降も基本的には茶屋で食されるものであり、これがおみやげとなることはまずなかったといっていだらう。宮島のおみやげとして近世以来一般的だったのは、五色箸、妻楊枝といったかさばらない非食品であった。この名物は天正年間から行われてきたとされる厳島神社への白色楊枝奉納の風習にあやかって創り出されたものであった⁽²⁹⁾。

これに対して近世後期に盛んとなってきたのが杓子などのいわゆる宮島細工の生産であった。伊予から宮島に渡り出家した誓真という人物は、土産物とするために杓子を製造し、次第に島民もこれを

模倣するようになった⁽³⁰⁾。その後杓子、挽物、ろくる細工や木匙など宮島で生産される木工品を総称して宮島細工と呼ぶようになり、名産品として知られるようになっていった。一八八九(明治二二)年には、轆轤細工一六、飯杓子工人三〇、匙杓子工人一三など合計約八〇人もの職人を数え、これを販売する物産商店も二〇戸に達するなど、次第に生産規模を拡大していった⁽³¹⁾。

とはいえ、こうした状況に拍車をかけ、一挙に生産を拡大したのが一八九四(明治二七)年に勃発した日清戦争だった。先にも触れたように、宇品港を控える広島は全国から数多くの将兵たちが集まってきた。

将兵の出発点か通過点であった多くの地域とは異なり、広島は集合点であり、彼らに対する態度も他の地域とは異なっていた。多くの将兵が集まった広島では、平穏な生活を脅かすやっかい者と見られる一方、貴重な収入源をもたらす金づるとも見られていた⁽³²⁾。

戦地への出発にあたり出征将兵らは、宮島を訪れ厳島神社に参拝することが少なくなかった⁽³³⁾。日清戦争中の厳島神社でも、法外の高値で物品を販売する商人たちが出現し問題となっていたのである⁽³⁴⁾。

いずれにせよ、日清戦争が勃発すると、出征兵士をはじめとする数多くの人々が集まるようになったことはまちがいない。その際産物店で杓子が売られているのを見て『杓子は敵をメシトル(飯取る)なり』という語呂合わせから争って買い求め、彼らが打ち付けていた杓子で厳島神社の廻廊は溢れんばかりになったという。

日清戦争の一〇年後に勃発した日露戦争でも、全国から動員されてきた大量の将兵が宇品から出征、復員するという構造は変わらなかった。この戦争の際も兵士たちは再び神社に杓子を奉納して戦地

へと旅立っていった。⁽³⁶⁾

戦争が終結し宇品へ復員した将兵は、それぞれの部隊の所在地まで輸送する列車に乗るまで数日待機するのが一般的であった。その間厳島神社にお礼参りすることも少なくなかったのである。この時には一〇年前とは異なり、千畳敷に杓子を奉納したが、⁽³⁷⁾その際、再びこれらを買って故郷へのおみやげとすることは可能であったと思われる。杓子以外では竹細工なども競って故郷へのおみやげとして買い求めていったという。⁽⁴⁰⁾

宮島のロク口師は日露戦争を迎えた一九〇四(明治三七)年には一〇〇人を突破し、大正はじめには二五〇人前後に達する⁽⁴¹⁾など、宮島細工の生産規模は急激に拡大していった。一九二〇年代には、杓子、竹細工、貝細工などを土産物として販売する店舗が軒を連ねるようになっていた。⁽⁴²⁾

こういった戦争を契機としておみやげ販売が拡大を遂げていくという構造は、宮島みやげのような成り行きに任せただけではなく、各地で意図的に生み出されていったものでもあった。

一九〇四(明治三七)年二月に『戦時成功事業』という書物が刊行されている。この月に勃発した日露戦争をまぢかに控えた時期に執筆されたものである。すでに見たように一〇年前に勃発した日清戦争で全国から数多くの兵士が動員され、戦地へと出征していたが、それにともなつてさまざまな商売などが生じることがわかっていった。

この本は日露開戦を前提として「自ら奇策を案出し苟も新事業を発見し以て実業界の霸王たり、世界の金傑たらんこと」⁽⁴³⁾、つまり戦争に便乗した金もうけを露骨に推奨したハウツー本である。

ここでは大陸の地図販売や会話集の販売に始まり、「早取写真」や「瞬間名刺」の印刷、花札の販売、玉突場、おでんや、焼芋屋の経営に至るまで、軍隊の大量動員にもなつてその周辺で生じるさまざまな事業のネタを列挙して具体的に解説しているが、その中の一つとして「土産物陳列場」がとりあげられている。

これは戦地へ赴く将兵やその見送り人を対象として、さまざまな物品をおみやげとして売りさばこうという算段であった。戦地へ動員される兵士や見送り人の中には、生まれてから初めて遠くへ旅する場合も少なくなかったであろうが、本書では、こうした「田舎の人の目を欲ばせる」⁽⁴⁴⁾ことが肝要であると強調している。ここでは主にこれから出征する場合を想定しているが、戦没することがなければ、彼らは基本的には復員してきたので、帰郷する際にも故郷へのおみやげを販売する商売が大いに繁盛したことは想像に難くない。少なくともこうした戦時におけるおみやげ販売が大きなマーケットとみなされていたことはまちがいない。実際日露戦争終結後の広島市内では、宮島細工をはじめとするおみやげを販売する商店が活況を呈したのである。⁽⁴⁵⁾その後の推移を知つてしまつている現代の眼から見れば、あからさまに不謹慎という印象を受けてしまつが、結果としてみれば、数多くの国民が国土の内外を広域に移動する戦争は、おみやげの知名度を広げる機会となつたことは否定できないだろう。

「軍都」とおみやげ

これまで日清・日露戦争という近代日本が直面した大規模な対外戦争が名物やおみやげの生成に大きな役割を果たしてきたことを見

てきた。確かに、数多くの人員が外地だけでなく国内を大規模に移動し集中するという点では、戦時は規模において平時に隔絶している。しかし、平時においても連隊などが置かれていた各衛戍地には近隣の地域を中心に兵士たちが集まってきていたのである。とりわけ仙台のような師団司令部が置かれていたような「軍都」ではその規模は大きなものとなった。

こうした「軍都」や連隊所在地などには、除隊兵士向けの「軍人土産」を販売する商店が存在していた。⁽¹⁷⁾これは郷里の人々から大々的に送りだされた兵士たちが除隊時に持ち帰り、帰郷してから配るといふものである。もちろんこうした習慣は入営者の家族に多くの負担をかけることもあり、長年その廃絶が叫ばれていたが、入営時に郷里の人々から多くの餞別などを受け取った以上、簡単になくなるものではなかった。⁽¹⁸⁾つまり兵役という「通過儀礼」を終えた兵士たちの証明ないし記念という性格があったのである。

このような観点からすると、軍人みやげは実は伝統的なおみやげとしての系譜を踏んだものであったと見ることもできよう。

こうした「軍都」の一つ際におみやげとして一般的であったのが、現在でも古道具屋や各地の郷土資料館などで数多く目に多くすることができ「除隊記念」などの文字が入った盃や徳利である。こうした軍都のひとつ、第七師団司令部の置かれていた旭川には旭豆という名物が存在する。これは富山から移住し売菓業を営んできた片山久平が、一九〇二(明治三五)年に大豆に砂糖をまぶした菓子として発売したもののだが、⁽¹⁹⁾同地に司令部を置く第七師団の軍人の故郷へのおみやげとしての発展したものである。⁽²⁰⁾

また海軍の軍港が置かれていた横須賀や呉などでは、軍艦や軍港

の諸施設を見学するという観光が盛んであった。こうした軍港を訪れた客を当て込んだおみやげも盛んに作られていた。例えば一九三〇年代前半の呉市でも海兵団子、軍港煎餅、軍艦煎餅などといった海軍に因んだ菓子類が軍港の名物として売られていたのである。⁽²¹⁾

二、小城羊羹の展開と軍隊

日清戦争の結果、日本は台湾を領有するようになり、以後島内の糖業の育成が図られた。当初は必ずしも順調に進まず、二〇世紀初頭にはまだ外国糖の輸入超過、外貨の流出などが問題視されていた。一九〇六(明治三九)年に糖業改良事務局を設置するなど改良に努めた結果、明治末期には、台湾および内地産の砂糖でほぼ需要を満たすようになる。⁽²²⁾もちろんその後も、砂糖消費税の増税などにより消費量が伸び悩む時期も続いたが、一九二〇年代に入ると消費総額、一人当たり消費量とも目立った伸びを示すようになった。⁽²³⁾こうした状況を受けて、砂糖の消費量はめだつて増えていくようになり、一人当たりの消費量も大正時代を通してほぼ倍増した。また、それまで個人・零細経営が専らであった菓子業界の近代化が進み、森永製菓のような近代的な製菓企業も誕生するようになってくるようになった。

こうして見ていくと、名物菓子にとつて日露戦争後は一つの大きな画期であったが、観光業や、糖業、機械化など、本格的な展開を遂げる要素が整ってきたのは、一九二〇年代以降のことであったと見た方がいいだろう。とはいえ、機械化および大量生産の進展は、名物菓子の生産にも影響を与えずにおかなかった。

佐賀市からほど近いところに小城という町がある。ここは古くからの宿場であり、城下町ではあるが、特に著名な名所旧跡があるわけではない。静かで落ち着いた町ではあるが、全国から観光客が数多く訪れるような、メジャーな観光地とはいえない。しかしこの町は現在、全国屈指の羊羹の生産地として知られるようになってい

るところが小城では、古来羊羹が名物として綿々と受け継がれてきたわけではない。ここで羊羹の製造が始まったのは意外に遅く、明治に入ってからのことであった。だから小城羊羹は近世以前の名物の流れをくむものではない。一八七二(明治五)年ごろに森永惣吉という人物が小城で初めて羊羹を製造したとされている⁽⁵⁴⁾。

惣吉の父庄助は、鍋島家の御用肴屋や八百屋を営んでいたが、維新後没落したので惣吉は当初さまざまな事業を試みた。その中で羊羹の製造販売に次第に絞り込まれていったようである。惣吉は製品の品質の改良に力を注いだ⁽⁵⁵⁾が、その中でも季節の変化にも左右されない保存性の向上は最も大きな課題であった。こうして森永の作る羊羹の名は次第に広まっていったが、大きな転機となったのが日清戦争の勃発であった。その際森永の製造した羊羹は軍隊の酒保用品として納品されたが、「他地方の菓子類は概ね変質腐敗を来す五月雨時に至っても、毫も異状を来さなかった」とされ、注文が殺到するようになったという。その後も森永は一八九八(明治三二)年二月には白羊羹、茶羊羹を発売し、さらに一九〇二(明治三五)年に開催された全国菓子品評会でも入賞するなど改良を続けた⁽⁵⁶⁾。こうして日露戦争後には、羊羹は小城のみならず、佐賀県の名物としてその名を知られるようになっていった⁽⁵⁷⁾。

このころまで小城で羊羹の製造販売を営んでいたのは森永惣吉一

軒だけであったが、二〇世紀に入ると全国菓子品評会で表彰されたことも預かり、横尾種吉、橋本庄平、柴田長三、山田亀吉、村岡安吉、篠原清次郎らが次々と開業し、一九一四(大正三)年には合わせて二九軒となるなど、次第に製造業者が増えていった⁽⁵⁸⁾。

村岡安吉は、一八八四(明治一七)年に小城の米穀商の長男として生まれたが、一八九九(明治三二)年、長崎から来た陣内啄一という人物に製法を伝授され、両親と共に羊羹製造を始めたとい⁽⁵⁹⁾る。こうした経緯からも明らかのように、村岡は比較的早い時期に参入したことは間違いないとしても、決して小城羊羹自体を創始したわけではなかった。

村岡も第一八師団司令部があった久留米に駐在所を置いて陸軍への食い込みを図ったり、小城駅での販売を始めたりするなど、森永に追隨するように販路の拡大策をとっていた⁽⁶⁰⁾。

さらに一九一八(大正七)年には、それまで小城駅の構内営業販売権を持っていた業者の一人が、スペイン風邪のために販売権を辞退すると、村岡はこの権利を手にいれ直接小城駅構内での販売に乗り出した⁽⁶¹⁾。その後唐津線だけでなく久保田、佐賀、鳥栖、肥前山口など近隣の主要な駅の構内にも販売を拡大していった⁽⁶²⁾。これは、直接には博多と唐津を直結する筑肥線の開通などに伴う、唐津線の地位低下に対応したものであったが、結果として知名度を向上させるという効果があったことも間違いない。

また佐賀市に開業したデパート玉屋と特約して進出を図るなどと、新時代に対応した販路の拡張に努めた。玉屋は小城の隣町牛津で創業した呉服屋であったが、日清戦争に際しては佐世保に出張所を設け、海軍から大量の包帯を受注するなど、軍港に近いという利点を

生かして成長してきた企業であった。⁽⁶⁾ 玉屋はその後佐世保、福岡、佐賀に進出してデパート化を図るようになっていた。

ここまでは森永がすでに導入していたやり方を真似たものともいえるが、一九二二（大正一一）年には七〇〇〇円を投じて工場を建設して、蒸気釜と電動あん煉り機を導入し機械化を進めた。蒸気釜は製品を焦げ目なくふんわりと仕上げ、あん煉り機はそれまでの手作業を機械化し、従業員を重労働から解放した。⁽⁶⁾ またいち早く銀紙充填包装を導入し保存性を向上するなど、機械化と大量生産への志向が村岡には際立っていた。こうして森永に比べて安価なことを武器に次第に売り上げを伸ばし、小城における羊羹業者の中心的存在となっていた。その後も村岡は自らの販路を単に拡大するだけではなく、それまで各業者が桜羊羹などと称していたものを「小城羊羹」として商標を統一した。⁽⁷⁾ 積極的に卸売りや行商を展開し大量生産を志向していた村岡にとって、商標の統一による知名度の向上は必要不可欠なことであった。⁽⁷⁾

このように小城羊羹は、明治以降に鉄道や軍隊、デパートなど近代的な装置をフルに駆使して急速に名物化していった菓子だが、それだけに近代的な社会システム変動の影響をより直接的に受ける傾向がある。一九二〇年代に断行されたいわゆる宇垣軍縮により、第一八師団が廃止されると、小城郡内の菓子生産額は急激に落ち込み、減少傾向は一九三〇年代半ばまで続いた。⁽⁸⁾ ところが、このころを境にして生産額は回復傾向を示すようになり、日中戦争勃発後も堅調な水準を維持した（表）。

だが、こうした状況は長くは続かなかつた。遅くとも昭和一六年には深刻な原材料の不足に悩まされるようになった。さらにこの年

(表) 佐賀県練物（羊羹含む）生産量の推移

	練物(斤)
1920年	1,164,256
1921年	1,134,308
1922年	1,001,372
1923年	962,520
1924年	838,133
1925年	795,099
1926年	288,200
1927年	823,059
1928年	845,638
1929年	849,028
1930年	817,936
1931年	779,203
1932年	659,546
1933年	677,918
1934年	702,649
1935年	898,518
1936年	903,625
1937年	964,734
1938年	1,013,425
1939年	929,019
1940年	906,917

出典)『佐賀県統計書』(各年度版)より作成。

には駅への納入を打ち切られるなど、原材料と販売ルートの確保には苦心するようになった。そこで一九四三（昭和一八）年には海軍軍需工場の指定を受けるとともに、佐賀慰問品販売有限会社を設立して慰問袋に小城羊羹を入れたセットを販売するなど、その維持に努めた。こうした努力が功を奏してか、村岡は戦時中のほぼ全期間を通じて羊羹の生産と販売を続けることができたのである。⁽⁹⁾

村岡は小城羊羹の創始者ではなかったが、軍隊や鉄道、デパートといった近代的な装置を十分に活用することによって販路を拡大し、機械化によってその需要を満たすだけの生産量を確保するとともに、「小城羊羹」としてのブランドを向上する役割も果たしたといえることができる。しかし、同時に名所や由緒に結びつかず、軍隊や鉄道、デパートといった近代的な装置により直接的に結びついて発展してきたことは、「小城の名物」としての色彩を相対的に薄

める影響をもたらしたと見ることもできるだろう。実際すでに一九三〇年代半ばには「小城でも作られている」とも指摘されるようになってきているなど、特定の場所や由緒の影は相対的に薄くなったことは否めない。

三、戦時体制とおみやげの盛衰

成田粟羊羹と米屋

成田は成田山新勝寺の門前町として、とりわけ近世以降大きく発展してきた。参詣者の増加に伴って、門前町では参詣者を相手としたみやげものが売られるようになっていった。長らく成田では一粒丸や消毒丸といった万能薬が名物として知られていた⁽⁶⁷⁾。また成田からの帰路に行徳で、干うどんや蒟蒻などをおみやげとして買い求めることも少なくなかったよう⁽⁶⁸⁾。いずれにせよ腐らず持ち運びに便利ということが求められる重要な要素であった。やがて、いちごおこしという菓子が成田の代表的な名物として知られるようになった。

どうやら、元々は成田不動に参詣する人々に対して周辺で産するイチゴを売っていたようだが、これにあやかかってイチゴの季節以外でもイチゴ風の菓子をおみやげとして売り出したのがその始まりであったとされている。このように成田不動にその由緒が結び付けられた名物であったが、その実態は「長さ五、六寸の紙袋に赤と白の丸いおこしを入れたもの⁽⁶⁹⁾」で本物のイチゴなど全く使っていないかった。

すでに一八八五(明治一八)年の段階で「粗製にして味なく⁽⁷⁰⁾」と評

されるような有様であり、その実態は「名物にうまいもの無しの諺にもれぬ、味のない⁽⁷¹⁾」ものであった。そこで、「広く諸人の味好みに適し販路益々開け⁽⁷²⁾」るような「改正名物」の出現が待望されるようになっていたのである⁽⁷³⁾。

こうした中、永楽堂菓子店は、新勝寺の精進料理の粟を用いたあのものにヒントを得て、一八八一(明治一四)年ごろから、毎年秋冬の時期に生栗を使ってむし羊羹を売り出していた。一八九七(明治三〇)年に成田鉄道が開通すると、東京から日帰り参詣できるようになり、それまで宿泊などに宛てていたお金をおみやげの購入に廻せるようになった⁽⁷⁴⁾。その影響もあり大煎餅、こんにやくなど、さらに多くの名物が生み出されるようになった⁽⁷⁵⁾。粟羊羹も当初は、腐りやすいとされていたが、保存性や味の改良が進むこと⁽⁷⁶⁾で、次第に成田名物の筆頭に挙げられるようになっていったのである⁽⁷⁷⁾。

成田で代々米穀商を営む米屋の長男として一八七九(明治一二)年に生まれた諸岡長蔵は、一八九九(明治三二)年、彼の祖父が風邪をこじらせた際にもらったお見舞いの大量の砂糖の利用法として羊羹の製造に進出したとされている。

このような経緯からも明らかのように、現在新勝寺門前町の代表的なおみやげの一つとされている栗ようかんも、実は近代になってから生み出された名物であり、諸岡はその創始者でもなかったのである。実際、二〇世紀初めにはまだ「元祖」を名乗る栗羊羹製造業者が多数しのぎを削っていた⁽⁷⁸⁾。こうした中諸岡は、呼び売りや掛け値販売をしないなどの方式が功を奏したこともあり、次第に売り上げを伸ばしていったという⁽⁷⁹⁾。また一九〇三(明治三六)年には成田羊羹同業組合を設立するなど、業者の組織化にも積極的に取り組ん

だ。また、同年に大阪で開催された第五回内国勸業博覧会にも出品し賞を受けるだけでなく、一九〇七(明治四〇)年に上野で開催された東京勸業博覧会では売店を出店し、「腐敗の虞なく風味甘美」という評価を受けるなど、知名度の向上に努めた。

こうして一九〇五(明治三八)年には一日四〇〇〇本程度であった生産量は、その後多い日で約四〇〇〇本となり、一九一二(明治四五)年正月にはついに六〇〇〇本を突破するなど、生産量を急激に増加させていった。栗羊羹を製造販売する業者も増加し、一九一九(大正八)年には成田町全体で売り上げが年間二〇万円に達し、成田を代表する名物の地位を確立していった。

生産量の急増に対応する形で諸岡は一九〇五(明治三八)年一月には自宅裏の工場拡張を拡張し、一九一七(大正六)年八月には工場に大釜を設置した。一九二二(大正一一)年二月には二重釜を据え付け、一九二五(大正一四)年一月には新たに工場を新築する⁽⁹⁵⁾など、次々と大量生産に対応する体制を整えていったのである。

このような動きは、京成電気軌道が成田まで開通して以降はより著しくなり、一九三三(昭和八)年には製造工場、一九三四年には包装工場、一九三六年には羊羹折工場、一九三七年には店舗と、毎年のように新増築を繰り返していった。その過程で米屋だけで成田町全体の羊羹生産高の過半を制するような状況になった。諸岡の資産も大正末年で総額約五〇万円、毎年の直接国税納税額が一九〇〇円に達し、貴族院多額納税者議員互選資格を有するなど、すでに千葉県でも有数の資産家となっていた。

新勝寺の門前町として発展してきた成田町は、一九一〇年代初期の時点で菓子類の年産額が二万五〇〇〇円に達するなど、他の産業

に比し圧倒的な地位にあったが、昭和に入ると年産額が二六万円と一〇倍以上に成長していた。この時点でも他の工業を合わせた年産総額が三六万円であったので、依然として経済上圧倒的な位置を占めていたことがわかる。

新勝寺と日中戦争

新勝寺は、将門の乱平定のために不動明王を祀ったことがその開山であったとされているように、鎮護国家や戦勝祈願と深くかかわっていた。

近代になっても日清・日露戦争をはじめとする対外戦争に際しては、軍人の部隊の参拝が相次いだ。特に日中戦争勃発後は将兵やその家族の武運長久祈願が激増するようになった。

一九三八(昭和一三)年三月から六月にかけて行われた成田山開基一千年記念祭は、日中戦争勃発前から計画されていたものであったが、結果として戦時下での開催となった。開帳の初日である三月二八日には、約五万人の参列者があり、成田の商店街ではその翌日と合わせると五〇万円の売り上げを記録した。日中戦争開始前の時点で米屋はすでに一日平均二〇〇〇本、最大で二万本の羊羹を生産する能力を有するようになっていたが、記念祭期間中は一日平均三万本、多い日には四万三〇〇〇本に達するようになっていた。この年の京成電気軌道と国鉄とも成田駅での乗降客は急増したが、その後戦時下においても成田山への参詣客は大幅な増加を続けた。

戦時体制期においても心身の鍛練や神社の参拝、奉仕などを名目として、各地の観光地の訪問客は急増していた。新勝寺はとりわけこの時期に戦争の推移と深くかわる形で、発展を遂げていったの

である。

戦争の進行は、米屋羊羹の動向にも大きな影響を与えた。米屋では遅くとも一九三〇年代半ばには通常の栗羊羹に加えて、保存性を大幅に高めた缶入りの羊羹の開発を進めていたが、日中戦争が勃発するとこの缶入羊羹をはじめとした自社製の羊羹を慰問品として積極的に戦地に送るようになった。戦地では激しく体力を消耗するためか、一般的に羊羹のような甘味品が好まれる傾向にある。日中戦争でも羊羹は非常に好まれたようだ。戦争が始まって数ヵ月後の一九三七(昭和一二)年一〇月に行われた戦地の兵士の座談会では、

「何といつても羊羹だよ」

「成田の羊羹を思ひ出すよ、あいつは甘いからなあ」

「長いお茶で羊羹が食ひたいネー、たった一切でいいよ」

というような会話を兵士たちが交わしているように、羊羹に対する欲求は高いものがあつた。この座談は東京市内出身者を対象としたものであつたので、この時点でもすでに成田の羊羹が人口に膾炙する存在であつたことがうかがえるが、慰問品として戦地で全国各地の兵士の眼に触れることは、その後の知名度の向上に寄与したことは想像に難くない。

戦時下における土産品業の衰退

戦時体制期には、大都市近郊の参詣地や行楽地を訪れる客の数は急増するようになっていたことは先に触れた。確かに日中戦争勃発後、物資の統制は徐々に進んでいったが、それにもかかわらず各地の名物の需要は伸び、一九四〇(昭和一五)年ごろには赤福や吉備団子でおよそ年間四〇万円、京都の八ッ橋に至っては全体で二〇〇

万円売り上げがあつた。静岡駅の山葵漬も一日当たり三〇〇〇から五〇〇〇個、一年で二〇〇万個の売り上げを誇つていた。

日中戦争以来継続していた各地の行楽地・観光地の好況は、日米開戦後もしばらくの間続いている。成田では戦時中も参拝客の増加が続いていたことは先に見たが、成田と同じ千葉県では、京成電軌が開発した谷津遊園地が、戦前における最高の売上高を記録したのは一九四三(昭和一八)年のことであつた。

ところが食べ物に関しては、臨時米穀配給規則、米穀対策要綱、米穀管理規則があいついで出されるなど、すでに一九四〇(昭和一五)年には厳しい統制が始まつており、遅くとも一九四一(昭和一六)年ごろには過酷な状況が訪れるようになっていた。

一九四一(昭和一六)年八月に富山県を旅行した宮脇俊三は次のように記している。

宇奈月の土産物屋を物色したが、売っているのは郷土玩具や絵葉書ばかりで、羊羹などはなかった。すでに地方でも甘いもの、腹のたしになるものは店頭から姿を消していた。

こうして、吉備団子は福井駅で売られた興亜餅のように粟を主原料とした餅、甘藷から作った餡を用いた代用食の名物も売りだされるようになった。特に米や砂糖を原材料に使用する菓子類の状況は深刻で、全体が米からできている草加せんべいなどはもちろんのこと、八ッ橋や吉備団子のような菓子でも、一九四一(昭和一六)年には、生産量がすでに前年の数分の一に落ち込むようになっていた。

また赤福は、原料が充分に手に入らなくなった一九四四(昭和一九)年から一九四九(昭和二四)年まで製造自体を中止するようにな

つた⁽¹⁰⁾。戦時期に生産が続けられたのは、軍需工場としての指定を受け、原材料の特配を受け、軍への納入を行っていた虎屋や村岡総本舗など少数の業者に限られた。

危機の要因は材料不足だけではなかった。すでに始まっていた欧州での第二次世界大戦と日米関係の悪化は、外貨獲得のために多くを外国人観光客や輸出に依存していた彫刻や細工物など、手工業品も、需要自体が減って存続の危機にさらされた。北海道の熊の彫り物なども、急激な需要の減少に悩まされるようになっていた⁽¹¹⁾。また、こうした物資の不足や統制は、各地域の特産品などの画一化・均一化をさらに進行させるような影響をもたらした⁽¹²⁾。米屋も戦局の推移とともに原材料の入手は次第に困難となり、一九四四(昭和一九)年に入ると休業を余儀なくされるようになった⁽¹³⁾。

おわりに

本稿では日清戦争、日露戦争および戦間期を経て戦時体制期に至るおみやげの展開を、戦争と軍隊との関係の中で明らかにしてきた。

本稿でとりあげたいいくつかの名物は、いずれも幕末から明治前期にかけて形成されてきたもので、戦争や軍隊だけを梃子に発展してきたわけではない。とりわけ戦時下の末期には、非常な苦境や中断に見舞われたものも少なくない。

しかし本稿で明らかにしてきたように、近代国家の装置としての純度が高い戦争や軍隊が、これら名物やおみやげのあり方に大きな影響を及ぼしてきたこともまちがいない。

一つ目は、物語の形成に深くかかわる場合である。とりわけ日清、

日露戦争では戦局が有利に展開したこともあり、吉備団子や宮島の杓子のように戦争の正当化と深く結びつく形で名物としての地位を確立していった。

二つ目は、戦争や軍隊という国民的な規模を持つシステムを通じて、その知名度を拡大させてきたことである。自社製品を入れた慰問品を販売したように、業者側もこうした装置を通じて、意識的にその拡大を図ってきたところもある。

三つ目は、流通先としての軍隊の役割である。さらに機械化や保存技術の向上など、実際の生産の局面においても少なくない影響も逃すことができないだろう。

とはいえ、こうした構造は戦局が有利に展開し、物資の生産や流通が順調に機能していることが前提であり、それが崩れると逆に縮小再生産を強制する役割を果たすという、極めて危うい構造の上になり立っていたものである。また、直接的な体験としても戦時期の後半には、ほとんどの人々が深刻な食糧や物資の不足に直面してきた。それ故にこれまではその時期の役割と影響ばかりが強調されてきた傾向がある。

しかし、本稿で明らかにしてきたように、日清戦争から近代日本が経験してきた対外戦争や軍隊というシステムを俯瞰してみた場合、むしろ名物やおみやげの展開に大きな役割を果たしてきたという側面が浮かび上がってくる。前近代から引き継いできた性格が色濃い地域の名物を、全国的に知名度を普及させ、近代のおみやげとして変容していく上に戦争及び軍隊という装置は、大きな役割を果たしたのである。

本稿は平成二二―二三年度科学研究費補助金若手研究(B)(研究課題番号・22720251)による研究成果の一部である。

注

- (1) 二〇〇一年大英博物館開催“Souvenirs In Contemporary Japan”解説リーフレット。
- (2) 神崎宣武『おみやげ・贈答と旅の日本文化』(青弓社、一九九七年)。
- (3) 加原奈穂子「旅みやげの発展と地域文化の創造―岡山名物「きびだんご」の事例を中心に」『旅の文化研究所研究報告』(一三三号、二〇〇四年)。
- (4) 拙稿「近代おみやげ考 ―東海道を中心に―」『国立歴史民俗博物館研究報告』(二五五集、二〇一〇年)。
- (5) 加藤陽子『徴兵制と近代日本』(吉川弘文館、一九九六年)、一ノ瀬俊也『近代日本の徴兵制と社会』(吉川弘文館、二〇〇四年)。
- (6) 中野良「大正期日本陸軍の軍事演習・地域社会との関係を中心に」『史学雑誌』(一一四巻四号、二〇〇五年)、吉田律人「新潟県における兵営設置と地域振興―新発田・村松を中心として」『地方史研究』(五七巻一号、二〇〇七年)、河西英通『せめぎあう地域と軍隊』(岩波書店、二〇一〇年)など。
- (7) 参謀本部編『明治二十七八年日清戦史 第八巻』(東京印刷、一九〇七年)四四頁。
- (8) 前掲『明治二十七八年日清戦史 第八巻』四六、四七頁。
- (9) 原田敬一『日清・日露戦争』(岩波新書、二〇〇七年)七七頁。
- (10) 前掲「旅みやげの発展と地域文化の創造」。
- (11) 「吉備だんご」『風俗画報』(三九七号、一九〇九年)。
- (12) 同右。
- (13) 岡長平『おかやま庶民史 目で聞く話』(日本文教出版、一九六〇年)一三六頁。
- (14) 松川二郎『趣味の旅 名物をたづねて』(博文館、一九二六年)四〇〇頁。
- (15) 岡山商業会議所編『岡山市商工便覧』(岡山商業会議所、一九一六年)一六頁。
- (16) 前掲「近代おみやげ考」。
- (17) 岡長平『岡山経済文化史』(松山定一、一九三九年)一〇三頁。
- (18) 例えば大谷正「日清戦争下の宮城県」、加藤聖文「ある「国民」兵士の誕生」檜山幸夫編著『近代日本の形成と日清戦争』(雄山閣出版、二〇〇一年)。
- (19) 岡長平『ぼっこう横町・岡山・聞いたり見たり』(夕刊新聞社、一九六五年)六〇一頁。
- (20) 前掲「旅みやげの発展と地域文化の創造」。
- (21) 前掲「おかやま庶民史」一三七頁。
- (22) 前掲「吉備だんご」。
- (23) 野村白鳳「郷土名物の由来」(郷土名物研究会、一九三五年)一九頁。
- (24) 加原奈穂子「未来へ向けた伝統創り 「桃太郎伝説地」岡山の形成」おかやま桃太郎研究会編『桃太郎は今も元気だ』(岡山市デジタルミュージアム、二〇〇五年)。
- (25) 前掲「郷土名物の由来」一一九頁。
- (26) 前掲『明治二十七八年日清戦史 第八巻』四六頁。

- (27) 清河八郎『西遊草』(岩波文庫、一九九三年)一九六頁。
- (28) 三好右京『伊都岐島名勝図会』(東陽堂、一九〇九年)七五頁。
- (29) 坂田軍一『島のかをり』(宮島物産営業組合、一九三〇年)九、一〇頁。
- (30) 前掲『島のかをり』八五頁。
- (31) 広島県物産陳列館編『中外商工彙報』(広島県物産陳列館、一九一八年)一七頁。
- (32) 前掲『島のかをり』一三頁。
- (33) 檜山幸夫『国民の戦争動員と「軍国の民」前掲』近代日本の形成と日清戦争』二一一―二二三頁。
- (34) 高山昇『厳島雑話』厳島神社社務所編『厳島記念講演』(厳島神社社務所、一九二二年)。
- (35) 『厳島神社内の物売』『芸備日日新聞』一九二五年二月三日。
- (36) 厳島神社社務所編『厳島』(厳島神社社務所、一九二八年)八四頁。
- (37) 山陽鉄道株式会社編『三七、八年戦役ニ関スル軍事輸送報告』『明治期鉄道史資料第Ⅱ期 軍事輸送記録(Ⅲ)』(日本経済評論社、一九八九年)。
- (38) 『厳島惨禍輸卒隊長の談』『東京朝日新聞』一九〇五年二月二三日。
- (39) 開国社編『日本案内 正巻之中』(開国社、一九一九年)一〇九四頁。
- (40) 『宮島細工の売れ行き』『芸備日日新聞』一九二五年一月三〇日。
- (41) 広島県教育委員会編『厳島民俗資料緊急調査報告書』(広島県教育委員会、一九七二年)五八頁。
- (42) 前掲『日本案内 正巻之中』一〇八八頁。
- (43) 横井円二『戦時成功事業』(東京事業研究所、一九〇四年)。
- (44) 前掲『戦時成功事業』五頁。
- (45) 前掲『戦時成功事業』二六頁。
- (46) 『軍隊と広島』『芸備日日新聞』一九〇五年一月九日。
- (47) 仙台市史編さん委員会編『仙台市史 特別編4 市民生活』(仙台市、一九九七年)三三四頁、国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』(国立歴史民俗博物館、二〇〇六年)三八―四二頁。
- (48) 佐々木一雄『兵営春秋』(青訓普及会、一九三〇年)二五五頁。
- (49) 旭川市史編集委員会編『新旭川市史 第四卷 通史四』(旭川市長西川政人、二〇〇九年)四二―頁。
- (50) 榎鉄男編『最近旭川案内』(上条虎之助、一九〇五年)六〇頁。
- (51) 中邨末吉『呉軍港案内』(呉郷土史研究会、一九三三年)一六〇頁。
- (52) 農商務省糖業改良事務局『砂糖ニ関スル調査』(糖業改良事務局、一九一三年)。
- (53) 相馬半治『日本糖業発達史』野依秀市編『明治大正史 第九卷 (産業篇)』(実業之世界社、一九二九年)五〇八―五一一頁。
- (54) 明治八年という説もあるようだが、正確な年代は不明である。(村岡安廣『肥前の菓子 シュガーロード長崎街道を行く』(佐賀新聞社、二〇〇六年)一四三頁。
- (55) 小城町史編集委員会編『小城町史』(小城町役場、一九七四年)七四九、七五〇頁。

- (56) 木下鹿一郎『佐賀案内』(木下鹿一郎、一九〇六年)七四頁。
 (57) 小城郡教育会編『小城郡誌』(木下泰山堂、一九三四年)二四四頁。
 (58) 前掲『小城町史』五〇六頁。
 (59) 村岡安廣『村岡安吉伝』(村岡総本舗、一九八四年)一〇頁。
 (60) 前掲『村岡安吉伝』一三頁。
 (61) 前掲『村岡安吉伝』八六頁。
 (62) 同右。
 (63) 前掲『村岡安吉伝』二八頁。
 (64) 前掲『村岡安吉伝』一一六頁。
 (65) 前掲『小城町史』七五五頁。
 (66) 株式会社佐賀玉屋200周年記念冊子実行委員会『佐賀玉屋創業二百年記念誌』(株式会社佐賀玉屋、二〇〇六年)九頁。
 (67) 前掲『村岡安吉伝』六五頁。
 (68) 前掲『村岡安吉伝』一〇七頁。
 (69) 前掲『村岡安吉伝』八八頁。
 (70) 前掲『村岡安吉伝』四四頁。
 (71) 前掲『肥前の菓子』一四四頁。
 (72) 前掲『肥前の菓子』一五一、一五二頁。
 (73) 前掲『村岡安吉伝』六九頁。
 (74) 前掲『村岡安吉伝』九四頁。
 (75) 前掲『小城町史』六三頁。
 (76) 永淵元斧『佐賀観光と名産』(佐賀県観光と名産社、一九三四年)一五頁。
 (77) 吉田銀治『成田山案内記』(一八九七年)二八頁。
 (78) 雪中庵雀志『成田詣』『文芸倶楽部』(七卷二二号)一九〇一年九月。
 (79) 黒川万蔵『成田名物の由来』(精研社、一八八五年)。
 (80) 大野政治『門前町成田の歩み』(大野政治、一九五五年)二八五頁。
 (81) 前掲『成田名物の由来』。
 (82) 前掲『門前町成田の歩み』二八五頁。
 (83) 前掲『成田名物の由来』。
 (84) 村上重良『成田不動の歴史』(国書刊行会、一九七四年)。
 (85) 雪中庵雀志『成田詣』『文芸倶楽部』(七卷二二号)一九〇一年九月。
 (86) 前掲『門前町成田の歩み』二八五、二八六頁。
 (87) 前掲『成田詣』。
 (88) 成田鉄道株式会社編『成田鉄道案内』(鉄道世界社、一九一六年)三一頁。
 (89) 平林馬之助『成田みやげ』(一九〇八年)巻末広告欄。
 (90) 前掲『成田不動の歴史』二九八頁。
 (91) 米屋100周年社史編纂委員会編『米屋100年の歩み』(米屋株式会社、一九九九年)四三頁。
 (92) 『成田の栗羊羹』『東京朝日新聞』一九〇七年五月五日。
 (93) 前掲『米屋100年の歩み』五七頁。
 (94) 成田市史編さん委員会編『成田市史 近現代編』(成田市、一九八六年)三六九頁。
 (95) 諸岡謙一『長蔵翁を偲んで』(諸岡謙一、一九七三年)四〇〇-四〇四頁。

- (96) 前掲『米屋100年の歩み』九八頁。
- (97) 前掲『成田みやげ』七一、七二頁。
- (98) 「貴族院多額納税者互選資格見込表」渋谷隆一編『大正昭和日本全国資産家・地主資料集成Ⅱ』(柏書房、一九八五年)。
本全国資産家・地主資料集成Ⅱ(柏書房、一九八五年)。
- (99) 野村藤一郎編『成田町誌』(一九二二年)一六一頁。
- (100) 成田町役場編『成田町の町勢』(成田町、一九三三年)。
- (101) 成田山新勝寺編『成田山誌』(成田山新勝寺、一九三八年)四九六―五三六頁。
- (102) 成田市史編さん委員会編『成田市史 近現代編』(成田市、一九八六年)五二七頁。
- (103) 前掲『成田市史 近現代編』五三一頁。
- (104) 千葉県商工水産課編『千葉県の土産品』(千葉県商工水産課、一九三六年)八四頁。
- (105) 前掲『米屋100年の歩み』一〇〇頁。
- (106) 前掲『成田市史 近現代編』六三二頁。
- (107) 前掲『門前町成田の歩み』三〇一頁。
- (108) 高岡裕之「観光・厚生・旅行」赤澤史朗・北河賢三編著『文化とファシズム』(日本経済評論社、一九九三年)。
- (109) 前掲『千葉県の土産品』八五頁。
- (110) 前掲『米屋100年の歩み』一〇七頁。
- (111) 「機上から降らす羊羹 歓呼して踊る兵隊」『東京朝日新聞』一九三九年三月一八日。
- (112) 「甘い物がほしいから」食物座談会「へ脱線」『東京朝日新聞』一九三七年一〇月一八日。
- (113) 「諸国名産品のゆくえ」(12) 山葵漬にきく世智辛さ」『朝日新聞』一九四一年二月二七日。
- (114) 京成電鉄社史編纂委員会編『京成電鉄五十五年史』(京成電鉄株式会社、一九六七年)六四四頁。
- (115) 宮脇俊三「増補版時刻表昭和史」『宮脇俊三鉄道紀行全集2』(角川書店、一九九九年)七七頁。
- (116) 「駅弁の新体制② 福井駅の興亜餅」『朝日新聞』一九四一年四月一三日。
- (117) 「変貌する街・草加」『東京朝日新聞』一九四二年六月二一日。
- (118) 「諸国名産品のゆくえ」(8) もも太郎も歎く、氣息えんえんの吉備団子」『朝日新聞』一九四一年二月一四日、「諸国名産品のゆくえ」(10) / 土産の都今やなし、八ッ橋も諺の仲間入り?」『朝日新聞』一九四一年二月二五日。
- (119) 浜田ます述・所功編『赤福のこと』(赤福、一九七一年)。
- (120) 「諸国名産品のゆくえ」(21) 哀調おびる木彫の熊」『朝日新聞』一九四一年三月一四日。
- (121) 「諸国名産品のゆくえ」(1) 興亜新八丁」『朝日新聞』一九四一年二月一一日。
- (122) 前掲『米屋100年の歩み』一一一頁。
(立教学院史資料センター学術調査員)